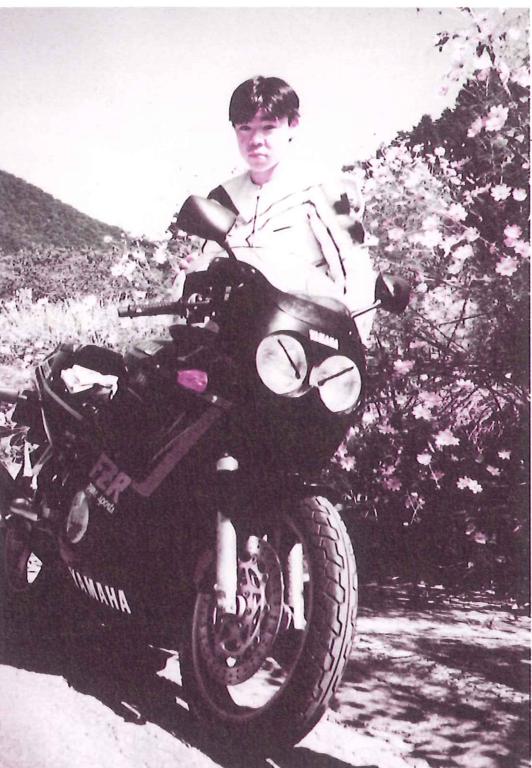


秋桜の伝言

大好きなバイクで逝った息子とともに

文・柳原三佳 ノンフィクション作家



1994年10月、母親の穂子さんと2台のバイクを連ねてミニツーリングに出かけた山田大助さん（当時18歳）。ちょうど秋桜が満開だった。

今年も庭のあちこちで、秋桜の花が咲き始めた。白、淡いピンク、ワインレッド……、色とりどりの可憐な花びらが初秋の風に揺れるたび、私はバイクが大好きだったひとりの青年と、その家族のことを思い出す。

群馬県桐生市にあるバイクショップ「はんぐおん」。小さいけれどなんともいえぬ温かな雰囲気が漂うこの店を久しぶりにたずねると、奥のカウンタから焙煎したての香ばしいコーヒーの香りが漂ってきた。この豆、ちょうど信濃から取り寄せたばかりなんですよ。今、美味しいのを入れますからね」

店主の山田眞一さん（65）は、穂やかな笑みを浮かべながら、バイクの絵が

ついたマグカップにお湯を注ぎ始めた。

のか、とつさに判断できなかつた。

「大助、起きろ！ 起きて、一緒に帰る！」

眞一さんは、大助さんを揺さぶりながら、何度も、何度もそう叫んだ。

まもなく、警察による死体検査が始ま

るとのこと。眞一さんは、廊下の椅子に崩れよう座り込んだ。そのときだった、事故の相手の親族と名乗る3人が近づいてきたかと思うと、ものすごい剣幕でこうまくしたたたのだ。

「おたくの息子がバイクでジグザグ運転しながら何台も車を追い抜いて、えらいスピードで止まっているこっちの車に勝手にぶつかってきたんだ。今後の話し合いはうちまで出てこい！」

放心状態だった眞一さんは、事故の状況もわからないまま、ただその場で謝るしかなかった。

しかし、この事故の真実は全く異なるものだった。原因は、見通しの悪い高架道路の脇道から、バックで本線に飛び出してきた相手側にあったのだ。

バイクで直進していた大助さんは、突然、目の前に現れた車を避けようと、とつさにブレーキをかけたが、転倒。

相手の車の下に身体がもぐり込んでしまったことが致命傷となつたのだ（上記、事故概要図参照）。

「加害者側は自分の過失を軽くするため、物言えぬ大助に事故の責任をなすりつけようとしたのです。まさに、死人に口なしです。私たち大助が精いっぱい生きてきた18年間を冒涙するよ

やなぎはらみか
バイク雑誌の編集記者を経てフリーに。交通事故、司法問題等をテーマに多くの遺族の取材を統合、各誌に執筆。『交通事故被害者は二度泣かされる』『自動車保険の落とし穴』『柴犬マイちゃんへの手紙』『遺品 あなたを失った代わりに』『泥だらけのカルテ』『家族のもとへあなたの言葉』はNHKでドラマ化された。著書多数。『巻子の言葉』はWEBサイトおよびフェイスブックで情報発信中。

大助、起きろ！ 起きて、一緒に帰ろう！

1995年4月22日土曜日、晴れ。

この日、学校が休みだった大助さんは、朝から店の手伝いに励んでいた。

つい1か月前に高校を卒業し、4月には産業技術の専門学校に入学。彼の夢は、両親が育て上げたこのバイクショッピングを継ぎ、バイクの楽しさを多くの人たちに伝えることだった。

午後1時半過ぎでした。大助は来店されたお客様と楽しそうに話をしていました。私は愛犬とまとめて店の奥でラッシングしながら、微笑ましくその様子を見ていました。

しばらくして、修理中のバイクの部品がひとつ足りないことに気づいた大助は、愛車のGSX-R(750)で足利のディーラーまで取りに行ってくれることになつたんです。いつものように革ジャンを着て、ツーリング用ヘルメットをかぶつた大助は話していたお客様に挨拶をし、そして、いつも same の笑顔で振り返りました。

私はそんな大助の後姿を見送り、G

風の旅人……、それは今から19年前、18歳という若さで亡くなつた山田さん夫妻の長男・大助さんの墓碑銘でもあります。だ。

この日、学校が休みだった大助さんは、朝から店の手伝いに励んでいた。

つい1か月前に高校を卒業し、4月には産業技術の専門学校に入学。彼の夢は、両親が育て上げたこのバイクショッピングを継ぎ、バイクの楽しさを多くの人たちに伝えることだった。

午後1時半過ぎでした。大助は来店されたお客様と楽しそうに話をしていました。私は愛犬とまとめて店の奥でラッシングしながら、微笑ましくその様子を見ていました。

しばらくして、修理中のバイクの部品がひとつ足りないことに気づいた大助は、愛車のGSX-R(750)で足利のディーラーまで取りに行ってくれることになつたんです。いつものように革ジャンを着て、ツーリング用ヘルメットをかぶつた大助は話していたお客様に挨拶をし、そして、いつも same の笑顔で振り返りました。

私はそんな大助の後姿を見送り、G

SX-Rの排気音が遠ざかっていくのを聞いていました」
ところが、2時間たつても大助さんは戻つてこない。

「今日はやけに遅いなあ……、と気に

なりだしたときでした、警察から突然、事故の知らせが入つたんで

す」

穂子さんは急いで店の軽トラックに乗り、外で連絡を受けた眞一さんもすぐに別の車に乗つて、大助さんが搬送されたという足利の日赤病院に向かつた。

走り慣れたいつの道は車線規制が敷かれ、激しく渋滞している。

「大助が巻き込まれた事故処理のため……！」

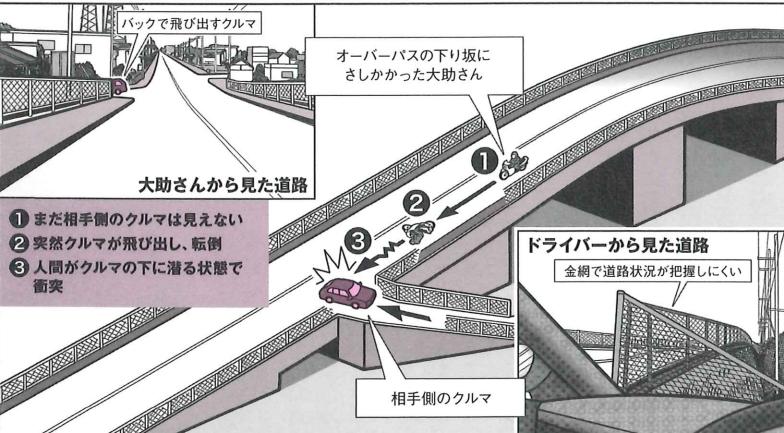
なんともいえない思いが頭の中を駆け巡り、穂子さんの心臓は不安で張り裂けそうになつた。しかし……。

二人がようやく病院に到着したとき、大助さんはすでに息を引き取つていた。

バイクにまたがり、笑顔を見せて店を出たのは、つい数時間前のこと……。いつもの笑顔で振り返り……。

私はそんな大助の後姿を見送り、G

山田大助さん死亡事故の概要



イラスト・佳岡廣澄

店の中にはサンドプラスチックや溶接機、ボルト盤のほか、さまざまな工具が置かれ、その空間は「ショップ」というよりも、どちらかといえば年季の入つた「ファクトリー」といった雰囲気だ。

「ミカさん（私のこと）、これね、地元で美味しいって評判のお菓子なの。お父さんの入れたコーヒーと一緒に、ぜひ食べてもらいたいと思って」

そう言つて妻の穂子さん（61）が差し入れました。夫のアートと一緒に、ぜひ食べてもらいたいと思つて

それを見たとき、私はハッとした。

「風の旅人……」

穂子さんは少し微笑んでうなずき、「偶然なんだけれど、なんだか偶然とひ食べたとき、私はハッとした。

そう言つて妻の穂子さん（61）が差し入れました。夫のアートと一緒に、ぜひ食べてもらいたいと思つて

それを見たとき、私はハッとした。

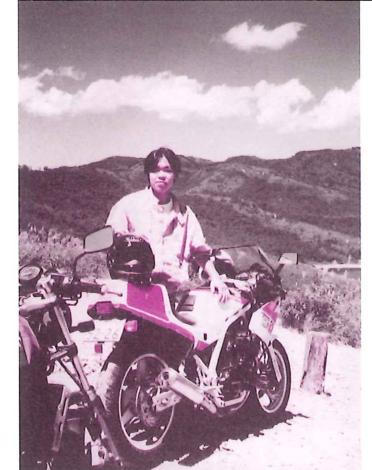
「風の旅人……」

穂子さんは少し微笑んでうなずき、「偶然なんだけれど、なんだか偶然とひ食べたとき、私はハッとした。

それを見たとき、私はハッとした。

「風の旅人……」

穂子さんは少し微笑んでうなずき、「偶然なんだけれど、



父親の眞一さんから譲り受けたCBR400F F3を駆って家族でツーリング。'94年の夏だった。

うな彼らの言動をどうしても許すこと

ができませんでした」

傷つき、苦しみ抜いた山田さん夫妻は、事故直後にあの言葉を発した加害者の親族を、名誉棄損で訴えることに決めた。単なる水かけ論ではなく、裁判所で決着をつけたかった。

「バイクに対してもしかりとした志と信念を抱いていた息子の名譽を守れるのは、親である私たちしかいない」

ただ、その思いだけだった。

結果的にこの裁判では、山田さん夫妻の言い分が全面的に認められ、「加害者側の言動は『大助に対し誹謗中傷するもので名誉を毀損した』との判決が下された。そして、事故自体の過失を争う民事裁判の判決でも、加害者の飛び出しが認められ、親族が浴びせたあの言葉には全く根拠がなく、大

助さんとバイクには、何の落ち度もなかったことが裏付けられたのだった。でも、たとえ裁判で勝訴しても、大助さんは戻ってこない。

「なぜあのとき、大助に部品の引き取りを頼んだんだろう……私は、今も

ずっと自分を責め続けています。

そして、最後に大助とお店で言葉を交わしたお客様も、「自分がもつと大ちゃん」と話をしていれば、事故に遭わなかつたのに……」そう言って、泣いてくださいました」

息子の面影を追いながらバイクに乗り続けた日々

山田さんファミリーの歴史の真ん中には、いつもバイクがあった。眞一さんと穂子さんも、もちろんバイクが縁で知り合った。穂子さんは、少しはにかみながら、思い出を語ってくれた。

「きっかけは、私がバイク雑誌の読者欄に投稿した短いエッセイでした。当時は、女性ライダーっていうだけで珍しかったんでしょ? 文通コーナーでもなんでもないのに、男性から80通以上も手紙が届いたんですよ。とにかくあのときはびっくりしました」

その中のひとりが、すぐ隣の栃木県

足利市に住む眞一さんだった。

3台のバイクで出かけたナイトツーリングは、「94年7月10日のことだった。大助はお父さんから譲り受けた(CBR400F)F3、私はSRX(250)、お父さんは下の息子とVFR(400)のタンデムで……」

あの夜、小さなラーメン屋さんのカウンターに4人並んで食べたラーメンの味は、今も忘れられません」

それは、どこにでもある日常の光景かもしない。けれど、山田さん一家が4人でラーメンを食べることは、二度と叶わぬ夢となつた。

「大助が亡くなつたとき、うちの店の店員さんが私に真剣な目を向けて、こう言つてくれたんです。『バイクを嫌いにならないでください』って……。そう、確かにあの頃の私は、道路を走るのが怖かつた、バイクに乗るのも怖

出会いから2年後、二人は結婚。かわいい2人の男の子に恵まれ、いつしか夫婦でバイクショップを作る夢を語り合うようになった。そしてその夢は現実のものとなつた。

高校生になつた大助は限定期解除にも合格。安全運転大会への出場をめざして、一生懸命練習に励んでいました。夏の夜風に誘われて、家族で初めて「息子たちもバイクが大好きでした」

事故から2か月後、群馬県の二輪安全運転大会の会場に、2番の青いゼッケンをつけた穂子さんの姿があつた。大助さんと一緒に出ようと約束していたこの大会に、穂子さんは大助さんのCBR400F F3を駆つて、一人で出場することに決めたのだ。

その後も、穂子さんは走行練習に精進。安全運転大会への出場をめざして、翌月、大助さんに遅れること7か月にして、穂子さんは限定期解除の試験に8回目で合格した。

その前で泣いてばかりだつたけれど、バイクにまたがると無心になれた。

二輪の試験コースは、大助さんと何の前で立いてばかりだつた。家の中では大助さんの遺影の前で泣いてばかりだつたけれど、バイクにまたがると無心になれた。

二輪の試験コースは、大助さんと何度も一緒に通つた思い出の場所。コースを走るライダーたちの後ろ姿に大助さんの面影が重なることもあった。

「けれど、シールドをパチンと閉めて、ニーグリップすると、まるで大助が私に乗り移つたかのようで……。東の間、気持ちを切り替えることができたんだと思います」

2001年、穂子さんは群馬県二輪



事故から2か月後、大助さんと一緒に出場した「二輪安全運転大会」に大助さんと穂子さんで参加した。その後、大助さんが目指していた二輪指導員の資格も取得した。

ピースサインで心の言葉を交わしたい

'06年11月、穂子さんは大助さんの目標のひとつだった二輪車安全運転指導員の試験に合格した。あの事故から、11年半の歳月が過ぎていた。

指導員になると、安全運転大会への出場はできなくなつてしまつ。それは



かつた。でも、大助の事故はバイクが悪かつたんじゃない。だから、私はバイクのことを決して嫌いになんかならない。あの子を失つた絶望の中、それでも大助の夢と一緒にバイクに乗り続けていこう、そう心に決めたんです」

事故から2か月後、群馬県の二輪安全運転大会の会場に、2番の青いゼッケンをつけた穂子さんの姿があつた。大助さんと一緒に出ようと約束していたこの大会に、穂子さんは大助さんのCBR400F F3を駆つて、一人で出場することに決めたのだ。

その後も、穂子さんは走行練習に精進。安全運転大会への出場をめざして、翌月、大助さんに遅れること7か月にして、穂子さんは限定期解除の試験に8回目で合格した。

その前で泣いてばかりだつた。家の中では大助さんの遺影の前で立いてばかりだつた。大助が亡くなつたとき、うちの店の店員さんが私に真剣な目を向けて、こう言つてくれたんです。『バイクを嫌いにならないでください』って……。そう、確かにあの頃の私は、道路を走るのが怖かつた、バイクに乗るのも怖

出会いから2年後、二人は結婚。かわいい2人の男の子に恵まれ、いつしか夫婦でバイクショップを作る夢を語り合うようになる。そしてその夢は現実のものとなつた。

高校生になつた大助は限定期解除にも合格。安全運転大会への出場をめざして、一生懸命練習に励んでいました。夏の夜風に誘われて、家族で初めて「息子たちもバイクが大好きでした」

事故から2か月後、群馬県の二輪安全運転大会の会場に、2番の青いゼッケンをつけた穂子さんの姿があつた。大助さんと一緒に出ようと約束していたこの大会に、穂子さんは大助さんのCBR400F F3を駆つて、一人で出場することに決めたのだ。

その後も、穂子さんは走行練習に精進。安全運転大会への出場をめざして、翌月、大助さんに遅れること7か月にして、穂子さんは限定期解除の試験に8回目で合格した。

その前で泣いてばかりだつた。家の中では大助さんの遺影の前で立いてばかりだつた。大助が亡くなつたとき、うちの店の店員さんが私に真剣な目を向けて、こう言つてくれたんです。『バイクを嫌いにならないでください』って……。そう、確かにあの頃の私は、道路を走るのが怖かつた、バイクに乗るのも怖

出会いから2年後、二人は結婚。かわいい2人の男の子に恵まれ、いつしか夫婦でバイクショップを作る夢を語り合うようになる。そしてその夢は現実のものとなつた。

高校生になつた大助は限定期解除にも合格。安全運転大会への出場をめざして、一生懸命練習に励んでいました。夏の夜風に誘われて、家族で初めて「息子たちもバイクが大好きでした」

事故から2か月後、群馬県の二輪安全運転大会の会場に、2番の青いゼッケンをつけた穂子さんの姿があつた。大助さんと一緒に出ようと約束していたこの大会に、穂子さんは大助さんのCBR400F F3を駆つて、一人で出場することに決めたのだ。

その後も、穂子さんは走行練習に精進。安全運転大会への出場をめざして、翌月、大助さんに遅れること7か月にして、穂子さんは限定期解除の試験に8回目で合格した。

その前で泣いてばかりだつた。家の中では大助さんの遺影の前で立いてばかりだつた。大助が亡くなつたとき、うちの店の店員さんが私に真剣な目を向けて、こう言つてくれたんです。『バイクを嫌いにならないでください』って……。そう、確かにあの頃の私は、道路を走のが

かづた。でも、大助の事故はバイクが悪かつたんじゃない。だから、私はバイクのことを決して嫌いになんかならない。あの子を失つた絶望の中、それでも大助の夢と一緒にバイクに乗り続けていこう、そう心に決めたんです」

事故から2か月後、群馬県の二輪安全運転大会の会場に、2番の青いゼッケンをつけた穂子さんの姿があつた。大助さんと一緒に出ようと約束していたこの大会に、穂子さんは大助さんのCBR400F F3を駆つて、一人で出場することに決めたのだ。

その後も、穂子さんは走行練習に精進。安全運転大会への出場をめざして、翌月、大助さんに遅れること7か月にして、穂子さんは限定期解除の試験に8回目で合格した。

その前で泣いてばかりだつた。家の中では大助さんの遺影の前で立いてばかりだつた。大助が亡くなつたとき、うちの店の店員さんが私に真剣な目を向けて、こう言つてくれたんです。『バイクを嫌いにならないでください』って……。そう、確かにあの頃の私は、道路を走のが

秋桜の伝言

正直言つて寂しい気もしたけれど、この先はバイクを安全に乗り続けるための技術を、少しでも世の中に伝えていきたいと思うようになったのだ。

「ちょっとと指導員っぽい話になりますが、二輪車の重大事故は50%以上が交差点付近で発生しているんです、直進バイクの進路をふさぐ右折車、一時停止をせずに飛び出していくクルマとの衝突事故は、四輪ドライバーが二輪車の存在を意識しないことで発生しているのではないかでしょうか。

混合交通はたしかに複雑で難しい。でも、道路に優しい風が吹き込んで、思いやりの心が広がれば、悲しい交通事故はきっと無くなるはずです。道路は交通戦争の舞台ではなく、平和なビースロードであるべきなんですね。

そんな思いを込めて穂子さんが立ち上げたのが、ドライバー、ライダー、歩行者など、道路を共有する人たちの「意思の疎通」を目的とする『ビーストミュニケーションプロジェクト』だ。心のピースサインでコミュニケーションを合うことによって、互いの気持ちを通じ合わせ、「ゆとり走行」をすることを提言している。

『ピースサインって、心の言葉が通い合う瞬間的な一期一会の挨拶ですよね。

『事故に遭うなよ』『無事に目的地

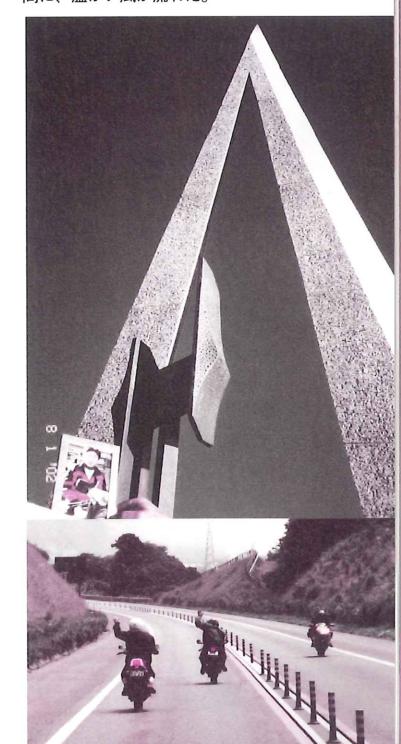
にたどり着けよ』と、道路を共有する者同志の思いやりが感じられる、それでも素敵なコミュニケーションだと思っています」

バイクは、そんな先人観や偏見によって真実が捻じ曲げられた事故がどれだけ起こっていることか。そのことを痛感してきた夫妻の思いは深い。

『ピースコミュニケーションツーリング』は、これまで群馬の国道122号線で何度も開催され、全国から集まってきたライダーたちと、おそろいの『ゆいびー・バンダナ』をなびかせてツーリングをしながら、ピースサインでの交流を図ってきた。ゆいびーとは、ピースサインをかたどったかわいいウサギのキャラクター。大助さんの弟がデザインしたものだ。山田さん夫妻と同じくバイク事故でわが子を失いながらも、交通安全を祈る遺族が何組も参加したという。

『このプロジェクトに参加するライダーは、常に『心のブレーキ』を持ち、交通マナーを守つて、ゆとり走行をし、四輪ドライバーに不快感を与えないことを心がける。一方、四輪ドライバーは、ライダーや歩行者に危険の及ぶ走行をしないように心がけ、道路を共有する者同志、互いを認識し合う。そして少しずつ、混合交通の道路上に人の

宗谷岬のシンボル『日本最北端の地』の記念碑。山田さん夫妻はその場所に、大助さんの写真をそっと置いた。そんな悲しみに暮れる2人を救ってくれたのは、ツーリング中のライダーたちが送り合うピースサインだった。一期一会の心が通い合う瞬間に、温かい風が流れた。



心の優しさを吹き込んでいきたいんです

ちょうどこの頃、父親の眞一さんは

大助さんの墓石の代わりに、金属のモニュメントの制作に没頭していた。『

一般的な墓石とは違うものを建ててやりたい』とこだわり続けた末にたどり着いた、眞一さんなりの答えだった。

墓碑銘には、かつて穂子さんが大助さんとのツーリングの思い出を詠んだ涼風に

君は風の旅人

の短歌の中の一語を選んだ。

コンピューターを使えば、どんな文

字も簡単に切り出せる時代だけれど、

それでもあえて、エアブラスマカッタ

ーで鉄板を一文字ていねいに切

り抜いた。それをモニュメントテープ

ルに取り付けたため、発光する溶接棒

と格闘し、思いを込めながらボルトを溶接していく。

／君は風の旅人／

じつと耳を澄ますと、大助さんの声が聴こえてくる。

「そうだよ、僕は旅をしてるんだ

「ハロー CQ・CQ 風旅人さん、

聽こえますか？ 空へ放つコール、受信してくれる。時空を越え、空で逢えたらうれしいよ」

父と共に語り合ったかったであろう

たくさんの言葉を、風の中に聞きながら、眞一さんは黙々と作業を続けた。

ようやく完成したそのモニュメント

は、今、桐生市内を一望できる山の中腹にある墓地に備えられている。

朝日が差し込む木立の向こうには、

大助さんの通つた懐かしい中学校の校庭が見え、部活に励む生徒たちの掛け声や、マラソンの足音、音楽部の練習の音や生徒たちにぎやかな話し声が

風に乗って聞こえてくる。

あの事故から、まもなく20年……。

否応なく時は流れ、いつしか大助さ



大助さんのお墓には、父親の眞一さんが心を込めて自作したモニュメントが建つ。刻まれた墓碑銘は「君は風の旅人」

お店の中に飾られていた穂子さんの写真。そう、96ページの大助さんと同じとき、同じ場所で撮った写真。この写真に写っているのは自分自身ではなく、ファインダーの向こうにいる大助さんだと言ふ穂子さん。彼女の大切な宝物だ。

大助さんのお墓には、満開の秋桜をバックに微笑む穂子さんの写真と大助さんの写真が、2枚ならんで飾つてあった。ライダーなら誰もが「走り

優しく風に揺れる。

「早咲きの秋桜の花を目にしたとき、私は大助の慈愛に包まれたように感じました。この秋桜たちは、大助と過ごした大切な時間を知っています。秋桜の花陰に大助が佇んでいるように私は感じるので」

大助さんの墓地にはモニュメントをふんわりと包み込むように秋桜が咲き、

心を込めて作った『君は風の旅人』のモニュメントに会いに行く。

夏が過ぎ、毎年この季節になると、

大助さんと穂子さんは、毎年この季節になると、秋桜をバックに微笑む穂子さんの写真と大助さんの写真が、2枚ならんで飾つてあった。ライダーなら誰もが「走り

優しく風に揺れる。

「時が流れ、癒される……、そんな言葉をよく耳にします。でも、時が重な

つて、身体の中のどこかに沈み込んだ

痛みが、ときとして転がる雪玉のよう

に大きくなつて、その雪玉は、心の奥底に氷河のようにもつまっているんじゃないかな……、今もときどき、そんなふうに感じることがあるんです」

そんな、居たたまれない思いが胸にこみ上げてきたときは、自宅からほど

近いお寺の参道を登つて、眞一さんが心を込めて作った『君は風の旅人』のモニュメントに会いに行く。

大助さんと穂子さんは、毎年この季節になると、秋

桜をバックに微笑む穂子さんの写真と大助さんの写真が、2枚ならんで飾つてあった。ライダーなら誰もが「走り

優しく風に揺れる。

「大助さんと穂子さんは、毎年この季節になると、秋

桜をバックに微笑む穂子さんの写真と大助さんの写真が、2枚ならんで飾つてあった。ライダーなら誰もが「走り

優しく風に揺れる。